EVERYBODY LOVES KOBE GAKUIN vol.29

障害者と健常者の関係性を通して社会を見る

人文学部講師
前田 拓也
Takuya Maeda

自身が一人の介助者として障害者の自立生活を調査

自らが「障害者の手足となる」ことで、ケアする者とされる者の関係性を見つめ、考えてきたのが前田拓也講師です。研究のキーワードは「障害者の自立生活」。この場合の自立生活とは、施設や家族による介護に頼らない暮らしのことです。「自分のやりたいことを自分で決定する『自立』という意味も含んでいます。そもそも、障害者は介助者に先導されることが多く、自分の意志を伝えて実現していくという環境がありませんでした。しかし自立生活では、障害者と健常者の関係性は全く逆になります。介助者は先回りせず、まず障害者が望むことを聞き取り、たとえそれが不合理であっても、障害者の手足のように淡々と応えてサポートしていきます」と前田講師。この関係性の逆転ともいえる運動の実績を基盤とした前田講師の研究「〈自立〉を志向する障害者とケアワーカーの相互行為に関する調査・実証研究」は、2012年度の科学研究費補助金申請に採択されるなど、大きな期待を集めています。

前田講師は大学院時代、フィールドワークの一環として、そのような自立を志す身体障害者の介助の仕事に携わっていました。「兵庫県にある自立生活センターで、介助者の一人として8年間働きました。地域で一人暮らしをしている身体障害者の家に行き、料理や掃除などの家事や外出のサポートをしました。これは『参与観察』と呼ばれる研究手法です。自分が実際に介助を体験することで、障害者や介助者の状況をダイレクトに観察できると考えました。もちろん、研究が目的であることは事前に説明し了解をいただいていました」

自立生活の事例を蓄積し社会に発信していきたい

福祉や介助に関する知識は皆無だった前田講師にとって、現場で働いた8年間は「自分がどう変わっていくか、自分で自分を観察している感覚だった」といいます。そして「特に抵抗感があり衝撃を受けたのがトイレ介助でした。しかし、そのように障害者との出会いが衝撃的であるということ自体が、実は社会的な問題なのです。言い換えれば、日常生活で障害者と健常者が出会う機会がない社会だからこそ、衝撃を受ける……。私は現場における障害者と介助者の細かいやりとりを見ることで、今の社会で障害者と健常者が置かれた状況を分析したいと思っています」

2009年10月には「介助現場の社会学――身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ」（生活書院・単著）を出版。これは前田講師の長年の介助体験をまとめたもので「今後も、現場の人たちが地道に取り組んでいる自立生活の介助事例を多く蓄積していきたい。その蓄積をどう位置づけ、障害者の自立生活の意義をどう社会に発信していくか。これは研究と現場の両方に立脚した私のような人間の使命です。自立生活を支援した経験を持つ介助者を一人でも多く作っていくことが重要ですし、この研究を通して障害者と介助者の関係性を変える、つまり社会そのものを変えることにかかわっていきたいですね」

元気なパワーを未来のために
神戸学院大学
法学部 経済学部 経営学部 人文学部 総合リハビリテーション学部 栄養学部 薬学部 大学院
有瀬キャンパス 〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518 Tel.078-974-1551（代）
ポートアイランドキャンパス 〒650-8586 神戸市中央区港島1-1-3 Tel.078-974-1551（代）
長田キャンパス（法科大学院） 〒653-0862 神戸市長田区西山町2-3-3 Tel.078-691-4888（代）
KOBE GAKUIN SINCE 1912
学校法人神戸学院は2012年に100周年を迎えました。